

■点字図書館での実践事例

ディスレクシアの子どもたちへの 点字図書館のアプローチ

社福)名古屋ライトハウス 名古屋盲人情報文化センター
野田裕貴

はじめに

当施設は、おもに視覚障害のある方に、点字や音声の図書を貸出する点字図書館業務を行っています。DAISY図書は、視覚障害者だけでなくディスレクシアの方にも有効と聞いてはいるものの、施設名（盲人・点字）等から問い合わせも少なく、視覚障害者以外の方との自然な接点が取れていませんでした。そんな中、2013年に障害者差別解消法が制定され、2016年の施行まで3年間、「何かしなくては！」と、思い悩んで手がかりを探していました。そんな試行錯誤の取り組みの中で、キラコンテンツとしての「わいわい文庫」に出会うまでをお伝えします。

点訳・音訳に続く柱「テキスト」

まず、2010年のサピエ図書館の誕生に合わせ、全国の点字図書館では、点訳・音訳に続く大きな柱としてテキストDAISYが脚光を浴びました。製作ツールの「Producer」が登場し、当施設でも2012年にやっと製作ボランティアの養成講習を開くことができました。

しかし、当時はボランティアによる肉声のDAISY図書が視覚障害者の読者には大人気。テキストの再生環境もなかなか整わないため、テキストDAISYの反応はいま一步でした。そんな時に障害者差別解消法が話題となり、ディスレクシアの子どもたちへの提供が頭に浮かんできました。

ディスレクシア協会との出会い

ディスレクシアという障害について、書籍などで知識はあっても身近に対象者がいません。まずは利用対象者さんとの接点を見つけよう!と、市内の中央児童センター内にある中央療育センターに電話してみました。事情を話して紹介してもらったのがディスレクシア協会名古屋の吉田さんでした。吉田さんは「DAISY」という言葉は知っているものの見たことはありません。お互いの「知りたい」というニーズが合致した瞬間でした。同時期に、音訳ボランティアの養成講習受講生の中にも、臨床心理士でディスレクシアのお子さんをもつ方がいて、あれよあれよという間に支援者の輪が広がっていきました。

秀逸！「わいわい文庫」ブルー版

ディスレクシア協会に、参加者を集めていただき、DAISYを知ってもらう企画を練ったところ、「マルチメディアDAISY教科書」にたどりつきました。ただ、ものがない。いまでこそ普及のためサンプルを借りることができるようになりましたが、当時はディスレクシア児童の親御さんに実際にお見せできない状態でした。

そんな時に知ったのが「わいわい文庫」。急いで伊藤忠記念財団に電話すると、すぐに2015年までの3年分のCDを送付していただきました。無料という衝撃と、届いたたくさん絵本のカラー書影を見て、「これだ！」と心が躍りました。

そして秀逸だと感じたのが、親御さんや支援者など、読みに障害のない方も使えるように著作権処理をしてある「わいわい文庫」ブルー版です。外部での説明会で、参加者全員に見せることができますし、帰りにお貸しして利用登録前のお子さんにご自宅で試してもらうことができます。皆さんが喜んで持ち帰り、返却のアンケートでも好評を得ました。

間違えていたアプローチ

ただ、その後すぐに「来館→利用登録→貸出し」とつながったかというところではありませんでした。理由として

- 説明会の参加が親御さんだけで、利用登録のために再度の来館が必要。
- iPadなどにくわしくない方が多い。

◦DAISYの用語がむずかしく感じられる。が考えられました。

反省も込めて、説明会を施設内で行い、ボランティアさんの協力を得て子ども自身が参加する形とし、その場で体験・利用登録まで行うように改めました。利用登録も診断書の提出は求めず、日本図書館協会のガイドラインに沿った聞き取りでOKに変更。

しかし、ここでもまた課題が出てきました。参加した子どもたちの年齢や、読みにくさの症状、親御さんのIT機器への理解など、個人差が大きすぎて、説明会形式では中途半端になり、全員の満足度が上がらなかったのです。

さらに、利用登録をしてくれた子どもに「どんな本が読みたい？」と率直に聞くと、集めているカードゲームに書いてある文字とのこと…。勝手に児童書をイメージしていた自分がいかに的外れだったかがわかりました。読むのが苦手な子どもたちは、本になじみがなく、興味がなかったのです。



読みたいカード（イメージ）

まずは読書より、学校の勉強

親御さんの想いも、読書というよりは、日々の学習の遅れに向いている方が大勢でした。そのため、DAISY教科書の紹介が優先になり、「わいわい文庫」は紹介どまりで、継続的な利用につながりません。質問は勉強に役立つアプリのことが多く、もどかしさを感じましたが、読書は無理矢理するものでもないし…。

開き直ってまずはニーズに応えようと思いました。書くことにも困難がある子どもたちが多く、その支援として、ブラインドタッチの体験会を企画。ホームポジションから段階的にキーの位置を覚えられるソフトを探し、iPadでは「のりものタイピング」、Windowsなら「mikatype」というソフトを体験してもらおうと、子どもたちの反応も良く好評を得て、毎月ディスレクシア協会から希望者が出て、来館してくれるようになりました。



左：mikatype、右：のりものタイピング

貸出はスマートレーターで

このブラインドタッチ体験で、定期的に利用者の方と接点を持つことができ、中には、無理に学校の勉強に追い

つくよりも、好きな読書をさせたいという親御さんが少しずつ出てきました。

現在は2名のディスレクシアの子どもたちに貸出を継続しています。貸出に点字用郵便が使えず、利用対象が県内在住と広く遠方のため、来館での貸出しも大変。希望者には事前にスマートレーターを複数用意していただき、それを使って貸出上限の6枚のCDを入れて貸出しする方式をとりました。



CDを6枚入れて、スマートレーターで

この2名の親御さんは、CDからiPadへの図書の転送が自分でできる方だったのも好都合でした。お電話でのヒアリングでは、いずれの方も「わいわい文庫」の『11ぴきのねこ』がお気に入りとの回答。喜んで使ってくれている様子が見え、うかがえました。

おわりに

視覚障害者の方をおもな利用者として運営している点字図書館。法律や世の中の支援の流れに合わせて、ディスレクシアの子どもたちへ「わいわい文庫」などの紹介をしてきましたが、まだまだ普及にはほど遠い状態。全国の点字図書館の参考になって、ディスレクシアの子どもへの理解・支援につながればと思います。